

KHM1「かえるのおうさま」に見るグリム兄弟の童話観

06K064 山尾 亮介

はじめに

『グリム童話』は、現在世界の多くの国で親しまれている物語集の一つである。ウォルト・ディズニーがこの童話集に収録されている「白雪姫」や「眠れる森の美女」を映画化しているし、日本では子供向け絵本の代表格と言えるのではないだろうか。これを読む人々は、ある話には憧憬を覚え、ある話には教訓を学び、ものによっては笑い話として、また別の話を英雄譚と見、あるいは怪談として捉えることもあるだろう。

小論ではこの『グリム童話』を題材として、その蒐集者であるグリム兄弟の思考に触れてみたいと思う。今回注目するのはKHM1、すなわちグリム童話を開くと最初に眼に入ってくる物語、「かえるのおうさま」である。

「かえるのおうさま」がどうしてこの位置にあるのか。また兄弟はこのお話をどうして先頭に置き、どう文章を整えたのか。そして、そこから見える兄弟の信じたかったものとはなんなのか。これらを順を追って解説していきたいと思う。

テキストである『完訳グリム童話集』（金田鬼一訳、岩波文庫）の他に、参考文献として主に『グリム童話の世界——ヨーロッパ文化圏の深層へ』（高橋義人著、岩波新書）を使用した。

1. グリム兄弟の童話

まずはグリム童話の成り立ちについて触れておくことにする。

1803年、グリム兄弟はマールブルク大学において、ロマン派のクレメンス・ブレンターノとアヒム・フォン・アルニムに出会う。それから数年後、ブレンターノから童話集出版の話を持ちかけられ、当時蒐集してあった草稿を渡した兄弟だったが、ブレンターノは出版を取りやめてしまう。後に兄弟は手元に残った草稿の写しで原稿を書き上げ、1812年に刊行されたのが、今日世界中で愛されている『グリム童話』（原題：『子供と家庭のための童話』Kinder- und Hausmärchen）である。これらは山村市井にて土着の人々が語り継いできたゲルマン民族の伝承であるとされる。

同じような蒐集を行い、かつ童話集を出版した人物にペロー（フランス）やルートヴィヒ・ベヒシュタインなどがいる。ペローはやや年代が早いものの、彼の場合は民話を正確に伝えようというよりは、宮廷女官への教訓物語の題材としての側面が強かったようだ。ベヒシュタインに関しては童話の完成度はグリムらに劣らないと言われており、研究対象としてもよく持ち出されるものの、グリムより少し遅れた時期だったことが災いしてか『グリム童話』ほどの知名度はない。

さて、グリム兄弟の話に戻ろう。彼らがこの童話集を完成させるに至った動機は、彼らが「これらの民話のなかには、とうの昔に失われてしまっていたと思われる太古のドイツの神話が潜んでいる」（初版第二巻序文）と感じたからだ。実際彼らは童話の蒐集を続けるうちに、これらの民話が当時のキリスト教的な土台より以前の時代の残滓を秘めつつ成り立っていることを知る。おりしもナポレオンの侵略を受けながらも民族意識と国家統一への志向が高まっていた時代において、兄弟が「ドイツ」の原型を捜し求めたのも当然のことと言えるだろう。そして、兄弟はそれらを忠実に書き記しまとめあげるための方針を、第三版の序文にこのように書いている。

メルヘン蒐集の仕方について言えば、私たちはとりあえず忠実と真実を旨とした。私たちが勝手に付け加えたものは何ひとつとしてないし、伝承の状況や特徴を美化することはせず、内容を伝えられたままの形で再現した。表現が大部分私たちのものであることは自明のことだが、それでも私たちは、特徴的だと気がついたものはいかなるものも残し、こうした点においても、メルヘン蒐集に自然のままの多様性を保たせるようにした。

この言は、現在のグリム研究者のあいだではすでに信用されなくなって久しい。「勝手に付け加えたものは何ひとつとしてない」にも関わらず「表現が大部分私たちのものであることは自明のこと」という矛盾した両節は、「かえるのおうさま」ひとつ取ってみても、初版と完全版である第七版の文章を比較すれば明らかであろう。グリム兄弟、殊に弟ヴィルヘルム・グリムは、その文才により、蒐集した民話を彼自身の言葉によって「編纂」したのであった。

更には彼らの言う「太古のドイツの神話」がこれらの民話に介在していたかということ、必ずしもそうではないことも分かっている。彼らがこれらの民話を蒐集したのは口伝でしか民話を残せないような老人ではなく、知識人や貴族といった上流階級の女性からのものが多かった。

これに関しては当時から指摘する人物がいたらしく、兄ヤーコプの元へ彼の友人から手紙が届いたりしている。これが1812年のことなので、これは初版に対しての手紙ということになるか。その3年後、今度は表現を子供向けへと改められ、多くの人に読んでもらえるようにしたのが第二版である。

しかしヴィルヘルムは、なにも別の用途に合わせて——たとえばペローのように一定の読者向けに物語を書くために——これらを蒐集・編纂したわけではない。前述の通り彼らは「ドイツの原型」を童話に求めたのであって、これを追求するには他の用途に使うための改変など有ってはならなかった。つまり、彼らがこの童話に施した編纂は、恣意的なものはまったくなく、あくまで（彼らの中の、ではあるが）「ドイツ観」に基づいて為されたのだらうと考えられる。

そしてその観念が色濃く反映されるのは、もっとも目立つところに設置されたお話、KHM1「かえるのおうさま」なのではないかと私は推測するのである。

2. ヨーロッパにおける「動物」

現在の『グリム童話集』において「かえるのおうさま」は巻頭に置かれているが、手稿の時点では二十五番目に載っていたという。また、兄弟は『グリム童話』につけた注釈のなかで、このお話を「ドイツ最古のメルヘンのひとつ」とまで言っている。このことから、グリム兄弟がこのお話になんらかの思い入れを抱いていたことがうかがえる。

ある日、王様のお姫様が森の湖に金の鞵を落としてしまう。そこへカエルが現れ、王女さまと同居をすることと引き換えに鞵を取ってくることを承諾させ、鞵を水から引き上げる。しかし王女さまは約束を破ってさっさと城へと逃げてしまう。その後の夕食の席、王女さまが食事を始めようすると、カエルが門を叩き、「入れてくれ」とせがむ。王女さまは嫌がるのだが、事情を尋ねた王様の命令によりカエルを受け入れざるを得なくなった。カエルは望み通り王女さまと食事をし、それどころか寝室へ連れて行って一緒に寝るようにとまで言う。怒った王女さまがカエルを壁にたたきつけると、なんとカエルは美しい王子に変身する。そして二人はめでたく結婚したのだった。場合によってはこの後に、彼らを迎えに来た忠臣ハインリヒの鉄のたががはじけ飛ぶエピソードが入る。

「かえるのおうさま」の物語は、いわゆる異種婚姻譚、人間が動物と結婚する話に分類される。世界中に散見され、神話時代にもしばしば見られる、御伽噺としてはポピュラーな分野である。日本人にとって馴

染みが深い異種婚姻譚として、高橋は「鶴の恩返し」や「羽衣伝説」を挙げている。

「鶴の恩返し」では、男（老夫婦と語られる場合もある）が、怪我をした鶴を助け、空に返してやる。しばらくして美しい女性を嫁にもらいしばらくは幸せな生活を送るのだが、ある日女は「私が機を織っているところを絶対に見ないで下さい」と告げ、部屋にこもり、上質な織物を織る。男が好奇心に勝てずに部屋を覗いてしまうと、そこにいたのは以前助けた鶴だった。鶴は約束を破ったことを嘆き、空へと去っていく。

また「羽衣伝説」では、地上に降りて水浴びをしていた天女（白鳥の姿をしているとされる）に見惚れた男（やはり老人の場合もある）が羽衣を隠し、それによって天女は空へ帰れず、男の嫁になった。子供ももうけ、幸福な生活を送っていたが、あるとき天女は家の中から羽衣を見つけ、男のもとから去る。

このように、日本民話では動物の方が人より気高い存在とされており、日本のメルヘンでは「人間が、自ら人間に変身した動物と結婚する」話が多い。それに対して、ヨーロッパではどうだろうか。ほとんどのメルヘンでは、「悪い魔女」が動物に変身させる魔法を使い、しばしば「人間が、動物に変身させられた人間と結婚する」話が多くある。つまり、動物の方が卑しい存在であると考えられている。しかし他方、自分から変身するメルヘンも存在しないわけではなく、「三枚の羽」（KHM63）や「泥棒名人とその師匠」（KHM68）、「はりねずみのハンス」、「ろぼっ子」などは能動的な変身が描かれているうえ、人間動物両者の行き来も可能である。

孫引きとなるが、『メルヘンと現実』の著者L・レーリヒのメルヘン研究によれば、「自ら変身する」過程を描いたメルヘンはイヌイット、アメリカ先住民、アフリカなどの非ヨーロッパ世界に数多く分布している。そのレーリヒがさらに注目したのは、K・ラスムッセンのイヌイット・メルヘンの研究である。このメルヘンには動物と人間の逆転現象、人間が四足で歩き回ることであるかのように書かれており、これをもとにレーリヒは「動物への変身はもともとは罰でも呪いでもなければ、不思議なことでも厭らしいことでもなかった」、「むしろ動物世界と人間世界は同等の地位を持つものとして隣接していた」と考えている。

さらに、ヨーロッパにおける狼男は元来は怪物ではなく、農耕儀礼のための風習、悪霊を打ち払うための存在だったとされる。これは日本で言えば、なまはげや獅子舞などに当たるのかもしれない。こうした恐ろしい格好をして悪霊を払う例は世界でいくつも見られる。「変身」というのは、自然（動物）と人間のあいだの橋渡しを行うものなのである。

だが、キリスト教のもとで標榜されるようになった人間中心主義によって、人間と動物、すなわち自然は同じ次元で語られる生物ではなくなった。こうした流れのなかで変身譚の意味合いが変わっていき、「自分から変身する物語」ではなく「変身させられる物語」、「貶められる物語」へと変わってきたのではないかと考えられている。物語的に見ても、童話における変身譚が「一旦その姿になり」、「元の姿に戻ることで救済される」という形を取ったとき、二つのエピソードの間隙には凹んだ部分がなくてはならない。

それでも初期のメルヘンにおいて動物は人間と同等の存在であり、「変身させられる＝貶められる」ものではなかった。童話における動物というものは、現代のような「人間の置換」ではなく、「人間と対等な互換」だったのだと言えるだろう。

3. 「かえるのおうさま」

さて、ここで話はようやく「かえるのおうさま」に戻ってくる。グリム兄弟は、このKHMI「かえるのおうさま」を手稿から完全版にかけて大きく書き増ししており、そのほとんどは描写の追加である。冒頭の情景描写や直接話法の挿入など、他のお話には見られないほど力を入れたが、ヴィルヘルムはひとつ、話の流れに関する大きな加筆をした。それは、王子がカエルになった理由、「悪者の魔女の魔法」である。

前述の通り、動物に変身することはもともと忌避されるようなことではなかった。それにも拘わらず——あるいはそれゆえに——ヴィルヘルムは加筆の際に、王子がカエルに変身した原因を求めた。その部分は初版では「変身」となっており受動か能動かも不明だったが、第二版以降では「変身させられた」と記され、誰に、の部分に「魔女」という如何にもメルヘンチックなキャラクターを当てはめたのである。この小さな舞台装置を入ただけで、「かえるのおうさま」は一層童話感を増し、緊張とスリルをほめかすことに成功している。

では、なぜヴィルヘルムは「変身」を受動的なものとして捉えたのかといえば、それは、カエルに変化することをマイナス・イメージとして捉えていたからである。カエルが王子へと戻るきっかけは、王女さまがカエルを壁に叩きつけることだった。これは「厭らしい動物を拒否する」行動であり、結果としてマイナス部分を拒否された王子には王子自身というプラス部分だけが残り、人間として王女さまと共に幸せを掴むことができた。これは、元に戻るものが「マイナスからの救済」であり、「拒否されるマイナス部分が王子ではない」からこそ成り立つ結末である。王子が自らカエルに変身していた場合は、そもそも救済が発生する状態ではなく、物語は始まらない。

結論を言ってしまうえば、「かえるのおうさま」の加筆はヴィルヘルム、ひいては当時のドイツ人たちの環境観と、彼のハッピーエンドへのこだわりが絡み合った末のものだったのである。だがしかしと繋ぐべきか、それゆえにと繋ぐべきか、異種婚姻譚が象徴する自然との橋渡しは、「かえるのおうさま」では成し遂げられなかった。「童話とは物語であり、ハッピーエンドで終わるもの」——ヴィルヘルムの方針は、小さなところで少しだけ、大切なものを犠牲にしてしまったのである。あるいは、それは我々が自然を犠牲にしていることの抽象であると考えることができるのかもしれない。

おわりに

「かえるのおうさま」には、『グリム童話』の普遍的な要素が大方詰まっている。王に姫に王子、魔法に変身に動物、魔女、森、三度の繰り返しや契約取引、メルヘンに見られる「約束」の多くがバランスを取るようにして融合されている。童話の世界への門としては、この上ない入り口だったのではないかと思う。

ゼミの講義で「かえるのおうさま」を扱うことが決まったとき、僕はほとんど困った。「赤ずきん」のような分かりやすい裏話もなく、「ヘンゼルとグレーテル」のように有名でもない。そもそも「かえるのおうさま」という話自体知らなかったのである。どうやら結構有名な話らしいが、そんな絵本も読んだことも聞いたこともなかった。初めて読んだときには、『グリム童話』の中ではスタンダードでマイルドな印象の話だな、と思ったものである。さらに、他のメジャーな作品と比較すると文献もやや少なく、絵解きにも苦労した。その拳句が発表だったのであるが、今回このレポートを書くに当たってまた別の文献を調べてみたら、まったく別の見地からの解釈を学ぶことが出来た。

童話から学び取れるものは、やはり語り継いだ人々の文化や思いなのである。

参考文献

- 高橋義人『グリム童話の世界——ヨーロッパ文化の深層へ』岩波新書 2006年
金田鬼一『完訳 グリム童話集』岩波文庫 1979年

(レポート指導教員 桑原ヒサ子)